

アドラーのケース・セミナー 『病気を使った独裁者』*

山田周作（東京）訳

* Adler, A. The Tyranny of Illness, in The pattern of Life, Alfred Adler Institute of Chicago, Chicago, 1982 (original 1930).

要旨

キーワード：

問題

今夜は5歳半の男の子ミルトンの事例について考えましょう。記録によれば、この子の現在の問題は、『言うことをきかない』『残虐性がある』『おちつきがない』、それに『呼吸をすることができなくなる』ということです。

一般に、子どもが言うことをきかず、乱暴で、おちつきがないときには、こうした性格傾向は、ある特定の人物に向けられているのだと考えてまず間違いはありません。その人物、すなわちミルトンの母親は、きっと心配性できちょうめんな女性で、子どもたちにもかなりの程度の協力を要求するのでしょう。

一方ミルトンには、母親に従わないでおこうとする傾向があきらかに見てとれます。これはおそらく、母親は今まで自分に対して不公平で厳格すぎたとミルトンが思っているからでしょう。彼は母親の最も敏感な部分、つまり心配性ときちょうめんさ、に的を絞って攻撃して反抗を示すのです。すなわち、家の中を完璧に整頓しておきたいと思っている主婦は、椅子やテーブルの上を飛び回ったり、カーテンを引きずり落したり、皿を割ったりするようなおちつきのない子には当然憤りを感じるものです。マイケルはそれを知っているのです。[1]

呼吸困難というのも、乱暴やおちつきのなさとはほぼ同じ種類の反抗です。がさがさ動きまわっていたずらをしている時には、この子は自分の筋肉でもって反抗を示していますし、また、呼吸ができなくなっている時には、この子は自分の肺でもって反抗を示しているのです。我々は、人間のあらゆる器官が語ることば、すなわち器官言語、を理解できるように努めねばなりません。

もっとも、ミルトンがある種の蛋白への過敏症に由来する本物の喘息にかかっている可能性は無いではありません。[しかし、まずそうではないでしょう。]もし本当にそうだとすれば、私はとても驚きますね。なぜなら、ミルトンの場合には、呼吸器による反抗がライフスタイルの重要かつ論理的な構成要素になっていると考えられるからです。[アレルギー体質のみによる、心因性の乏しい喘息発作であれば、対人関係の道具として使用されることはありません。ミルトンは喘息発作を対人関係の道具として使用していると考えられるので、器質性のものよりは心因性のものが疑われるのです。]

さて、記録を読んでみましょう。

—ミルトンは同胞3人中の末子である。12歳と9歳半の2人の姉がいる。2人の姉はまずは良好に適応しているようである。そして、末子のミルトンが常に問題の種になっている。父親の収入は週に45ドルであり、家賃は月に25ドルである。母は外では働いていない。家は4部屋あり、いつも小ぎれいに整頓されている。ベッドは3つある。一家の宗教は正統派ユダヤ教（旧約聖書の律法を忠実に守る最も保守的な一派）である。

多分母親は、二人の姉がきちょうめんなのでいつもほめていたのでしょう。そこでミルトンは、この領域で姉たちととともに競争することを断念してしまったのでしょう。彼が甘やかされて育ったことは想像に難くありません。もしミルトンが元来ある程度病弱であったとすると、病気になった時には甘やかしてもらえて快適であることを覚えて、そこで母親の注目を引きつけておくために人工的に病気になるメカニズムを採用するに至ったのでしょう。[このように、健康な建設的な方法で同胞と競合することに挫折した子どもは、不健康な破壊的な方法で競合して、親の注目を奪いとろうとするのです。]

—姉はひとりで寝るが、ミルトンは父親か母親と一緒に、多くは母親と寝る。

男の子が5歳半にもなればひとりで寝るべきです。この子がまだ母親と一緒に寝るのを好むのは、過度に母親に愛着を持っている何よりの証拠です。彼は夜の間中母親との結びつきを維持しつづけることに成功しています。一方昼間は、おちつきのない行動という方法によって、母親の注意をひきつけています。この年令の子どもが両親と一緒に寝ているということは、この子が家族関係の中心の位置にやすやすと安住しているということです。おそらく、ミルトンの生活の目標は、母親から好かれることと注目されることにあります。この家族内での葛藤は、母親はあきらかに息子が社会適応し、健康できちょうめんであるよう望んでいるのに、息子の方はというと、いつまでも赤ん坊であり続けるためにベストを尽くしているということにあります。

生育歴

—ミルトンの身体発育は以下の如くである。満期安産で出産したが、生下時の体重は不明である。母乳と人工乳の混合栄養で育った。7か月の時、ひきつけをおこした。幼時期を通じて、気管支炎・肺炎・肋膜炎・扁桃腺炎を患い、しかもクル病であった。

これは、彼の副甲状腺が未発達であるということ^[2]、人格全体が不安定であるということの証拠であると思われます。成長するにつれてこれらの欠陥は改善するのが普通です。幼児期のひきつけは、両親にとっては大層心配なできごとで、ミルトンの場合も、けいれんがおこって以後はずっと大変気をつけて観察され続けていたであろうことは疑うべくもありません。子どもには決して病気の本当の危険さを教えてはなりません。

この事例の冒頭で私が、ミルトンの呼吸困難は呼吸器系の器官言語による反抗であるという議論を展開したことを覚えておられるでしょう。彼が呼吸器系のさまざまな病気を体験してきたという情報は、この考えかたを一層確実なものにします。肺炎や気管支炎の時は、呼吸はとても苦しいのです。病気の子が苦しさにあえいでいる光景は、両親にとっては非常に心配なものです。

病気の間、ミルトンの一回一回の呼吸は両親の注目と心配の的でありました。現在彼は、うまく適応した姉たちとの競合において自分が不利な位置にいることに気づいていて、いわば自分の

肺でもって母親を心配させ注目を引こうとしているのです。彼は呼吸器系の器官言語でもって、「ぼくを大事にしておくれ。そうしないとぼくは病気になって、お母さんは悲しい思いをすることになるよ」と言っているのです。

—ミルトンは生まれた時から舌足らずであった。そこで舌の下部にあるひだを切断する手術を受けた。幼児期にひきつけがあったころ、ミルトンはダウン症であり一生なおらないだろう、と医者から言われた。

私の意見では、舌の手術は必要がなかったと思います。この家族は、この子が言語障害を持っていることを理解すべきでした。母親はミルトンがダウン症であると言われたことにきっとショックを受けたでしょう。我々は病歴のほんの一部を聞いただけですが、この診断は間違いだろうと思います。ダウン症児はすべて従順な良い子です。彼らはめったに問題児にはなりません。なぜなら、彼らは大変おとなしく、決してけんかしないからです。ダウン症児は時たま、非常に良い素質の家系の中から生まれます。そして、ダウン症に特有のさまざまな徴候があります。このタイプの精神遅滞児は、非常に小さい頭、丸くて上向きの鼻、それに、ひだがたくさんあって、自分の顎に届くほど長く、また非常に幅の広い舌などの特徴を持っているのが普通です。他にも、乾いた皮膚、時に水かきのついた手足の指などの色々の特徴があります。

—ミルトンは母親に強い愛着を持っている。一方、姉たちにはかなりの敵意を持っていて、姉たちに乱暴する。彼は自分の姉や他の子どもに対して残虐である。これといって決まった遊びかたはないが、ミルトンは外の通りで遊ぶのが好きである。

おそらくミルトンは、乳児期や病気の間中ひどく甘やかされていた結果、成長するにつれて母親の愛情と配慮とを失ってゆくばかりだと感じたのでしょう。母親というものは概して、子どもを産んでから1～2年の間は自分の生活のすべてを事実上その子にささげることのできるのですが、その後は、子どもは独立して行動するように、まさに生命の本質によって強制されるようになるのです。6歳の子どもは、生まれたばかりの赤ん坊のようにはめんどろを見てもらえませんが、またその子は、家族のこの情緒的雰囲気の変化を敏感に感じとります。自分がもはや以前のように甘やかしてはもらえないという認識が生じるやいなや、子どもは反抗の徴候を見せるようになるのです。

姉たちはおそらくミルトンに敵対していて、そこでミルトンは報復のために乱暴するのです。事例報告は、この子は残虐性があると言っています。心理学的に見ると、これはこの子が勇気を失って挫折しているということを意味しています。

異常な残虐性のある子どもは、非常にしばしば、自分の重要性がそこなわれ減少してしまった感じをごまかすために、弱くて疑う心を持たない子どもや動物に暴力をふるうのです。

—母親は、ミルトンの喘息発作を大変心配している。ミルトンの喘息発作には器質的な原因がみつからなかったので、小児科医から児童相談所へ紹介された。

子どもの喘息が器質的な病気であることはごくまれです。多くの場合は、ミルトンのように肋膜炎や肺炎にかかったことのある子どもにおきるのです。そういう子どもは、無意識的に喘息のふりをして両親を支配するのです。喘息は見ていると大変おそろしい病気です。このような子どもは、弱さを転じて力とするのです。ミルトンは、自分の優越性を強く印象づけたい時や、母を

攻撃して母の注意を引きつけたい時にはいつでも、自分の器官劣等性を利用するのです。喘息は彼の切札です。

—母親は、ミルトンはいつでも飛びまわっているところぼしている。いつも彼女は、ミルトンがけがをしないかと心配でならない。彼女はミルトンのことを心配しすぎている。ミルトンは午前中ずっと母親と一緒にすごす。その間中、彼は問題の種である。

このことは、この子の行動が母親に対して向けられていることの全き証拠です。ミルトンは、母親が心配性であることを知っています。ですから彼は大きわざのアクロバットを演じて見せて、母親の最も弱い部分を刺激するのです。

—午後は幼稚園です。そこではミルトンはかなりよく適応しているようである。ミルトンは、誰も一緒に遊んでくれないと不満を言っている。ミルトンが言うことをきかない時には、父親も母親も時にミルトンを叩く。ミルトンはいつでも「これをしてはいけない」「あれをしてはいけない」という壁に囲まれているようなものである。彼が言いつけに従っていたずらをやめた時、いつも呼吸困難の発作が始まる。母親はミルトンに、発作をおこさないでくれ、気分が悪くなるから、と懇願する。

ここに状況全体の核心が要約されています。まず、両親、特に母親は、ミルトンのことを心配する余り、他の子と同じように他で遊ばせることができません。そこでミルトンは、社会的接触を持ちたいという欲求に関して、欲求不満に陥ります。この子は同じ年ごろの子どもと一緒に遊べないので、そこで家の中でいたずらをして、母親を独占しにかかるのです。もし母親がミルトンを抑えつくと、ミルトンは呼吸困難に陥ることでもって母親を攻撃するのです。これは意識的なプロセスではありませんが、ミルトンは無意識的に、この発作によって獲得できるものが何であるかを知っているのです。

母親がある意味では有能な心理学者であることは認めねばなりません。と言うのは、彼女は、ミルトンの発作が器質的原因によるものではないことを知っているからです。だって、喘息発作が器質的なものだと思っているのなら、それをやめるように子どもに言うなどということはしませんよね。

しかし、母親のやりかたにはまずい点がひとつあります。すなわち彼女は、ミルトンの手に、ある危険な道具を持たせてしまっているのです。「私の気分が悪くなるから」という言いかたをすることで、母親は自分の病気や健康を子どもの気まぐれにまかせてしまっている点がまずいのです。

—ミルトンは伯父からもらった自転車を持っている。しかし、彼はこの自転車に乗る機会がありません。というのは、一家が住んでいる部屋は四階にあって、ミルトンが自転車に乗るためには、母親が四階から自転車をおろしてやり、終わればまた上げてやらなければならない。ところが、母親は再々そうしてやれるほど丈夫ではないのである。

前に、この子がクル病であったことがわかりました。〔クル病の子は、自分が望むだけは動けないので、いつも動きたいと思っており、それだけにクル病が良くなると多動になりやすいのです。逆に〕この子が現在多動であることから、かつてクル病だったのではないかと推論できるほどです。

さて、運動することへの欲求の強いこのような子どもにとって、自転車に乗ることは、当然とても重要なことがらでしょう。ですから、この子が自転車に望むだけ乗れない時、それに憤りを感じても不思議ではありません。

—ミルトンは眠る時、布団で眼をおおって寝る。また、ひとりで寝るのをいやがる。

これは人生への臆病な身がまえの典型的な表現様式です。眼をおおうことによって、この子は、敵意を感じている世界を閉め出しているのです。

それとこの子は、昼間は呼吸困難や多動でもって維持している両親との接触を、夜は両親と一緒に寝ることで維持するのです。

早期回想と特殊診断質問

—ミルトンの最も古い早期回想は、「ぼくは小さな赤んぼうのころ、歩いていたのを憶えている」というものである。

ここに示されている歩くことへの関心は、クル病がこの子の生活の中で重要な役割を果たしたことの、さらなる明確な証拠です。このタイプの子どもは、常に活動的ですし、身体運動の機会を十分に与えてやらねばならないのです。

—ミルトンの将来の希望は、医者になることである。「ぼく、診察がしたい」と言っている。彼は『大きな学校』に入りたいと思っている。また、字の書きかたを習いたいと思っており、文字の意味はまだわからないのに、すでに文字の形を書き写すことができるようになっている。

ミルトンのように病気がちであった子どもは、自然に、医者への役割を非常に高く評価するようになります。子どもが病気になると、親は医師を呼ばなければなりません。そして、神秘的で不可解な診察の後、両親は医者への指示に絶対的に従うのです。

私は、自分自身のおいたちが、多くの点でこの子の生育史とよく似ていると言わざるをえません。私の医者になりたいという願望がはじまったのは、うんと小さいころ、肺炎にかかってからだだと思います。私は、死を克服したかったのです。そして、医者になれば、それができると考えたのです。

—ミルトンは、自分ひとりで顔や手を洗ったり、服を着たりすることができない。しかし、彼は自宅周辺の地理をよく知っているし、お使いに行くこともできる。彼は自分の家の地理的位置がはっきりわかっている。

この子が自分の家のまわりの地理がわかっているという事実は、正常な知能を持っていることの十分な証拠です。この子が自分で顔や手を洗ったり服を着たりしないのは、そうしておれば、母親がいつでも自分のために働いてくれるからです。^[3]

さて、これで終りですが、これは非常に得るところの多いすばらしい事例でしたね。私たちの分析手順は、アドラー心理学の基礎理論を理解している人なら誰でもが理解できるはずのもので

す。

私たちはこの母親に働きかけて、ミルトンをもっと自立させよるようにせねばなりません。母親はミルトンを余り批判してはいけなし、ミルトンの将来についての自分の心配をあらわに見せてはいけません。この子は家から離れている時のほうが良い行動をするということに私たちは気付きましたね。そこで、母親に対して、この子はより広い社会的環境に入れてやれば成長できるのだということを説明せねばなりません。彼女を非難してはいけません。私たちは彼女が新しい視点を持つように勇気づけなければならないのです。

面接

(母親入室)

アドラー：今晚わ。私たちは、あなたのお子さんのミルトン君について検討していました。その結果、あなたが色々なことについて、大変面倒見のよい、誠実なお母さんであることがわかりました。ただ、子どもさんについて、いささか面倒を見すぎる傾向があるかもしれませんよ。ミルトンのようなかしこいお子さんが、この年令になれば、ひとりで顔や手を洗ったり服を着たりできるはずだとお考えにはなりませんか？

母親：あの子はひとりで顔や手を洗ったり服を着たりできるとは思いますわ。でも、あの子にやらせると、グスグスして時間がかかるので、学校に遅刻してしまうのです。あの子のやっているのを見ると、私はイライラしてしまってどうしようもなくなるんですの。

アドラー：何度か学校に遅刻して、自分が遅刻したことの自然の結末を体験させる方がいいと思いますよ。彼は外にいる時の方が家の中にいる時よりもうまくやれているようですが、お気付きですか？

母親：あの子は家にいる時の方がはるかに悪いです。カーテンはひきちぎるわ、テーブルから椅子へと飛びまわるわ、テーブルをひっくりかえすことさえありますのよ。

アドラー：そのことの説明は難しくありませんよ。お子さんは小さいころクル病だったでしょう。クル病の子どもは、なおると、筋肉の運動が大好きになるものなのです。彼は、しあわせであるためにはいつでも何らかの活動をしていなければならないというタイプの子どもですね、あなたは、彼を家の外でもう少し自由に遊ばせてあげることができるんじゃないですか？彼は自転車かスケートを持っていますか？

母親：自転車は持っています。でも、あの子が乗りたいというと、下まで運んでやらなくてはなりません。いつもいつもは運んでやれないのです。それに、あの子が自転車に乗っていると、車にひかれるんじゃないかと心配ですし。

アドラー：あなたは少し用心深すぎるかもしれませんよ。この子は賢い子ですから、あなたが何が危険であるかを言ってきかせてあげれば、けがをするようなことはしないだろうと思うんですがね。それに、それは、あなたがどんなに彼の能力を信頼しているかを見せてあげる絶好のチャンスだと思いますよ。私は思うのですが、あなたがもしそうしてあげれば、彼はきっとお返しをしてくれますよ。つまり、きっとより責任感のある行動をとるようになると思います。

母親：あの子が家の中を飛びまわっている時には、一体どうすればいいんでしょう？

アドラー：午前中は彼は外へ出して、広場で遊んでいる子どもたちの仲間に入れてみるとよいと思うんですよ。彼にはそういう種類の活動が必要なのです。あなたが彼を家に置いておくことが少なければ少ないほど、それだけ彼の成長にとっては良いことであるのです。近所の子どもたちに、ミルトンの自転車をかついで降りてもらおうことだってできるかもしれませんしね。

それと、ミルトンは本当の喘息ではないのだということを理解しておいていただきたいのです。つまり、彼は、あなたの注意をひきつけるために、あるいはあなたをおどかすために、呼吸困難という症状を作り出して使っているのだということをわかっていただきたいのです。彼が病気をしている間中、あなたは彼を甘やかしたり、したい放題させたりしていませんでしたか？

母親：そうですね。私は一生懸命に看病しましたわ。だって、あの子の病気はとってもひどいんですもの。

アドラー：その時にあなたが彼に与えた注目や援助を、昔どんなひどい病気になったかをあなたに思い出させることでもって、もう一度手に入れようとしているんです。もしあなたが彼の呼吸困難発作を無視して気付かないようにすれば、彼はきっと発作を出さなくなりますよ。それともうひとつ、ミルトンを一人で寝させるようにお勧めします。彼はもう大きいから、いつまでもあなたと一緒に寝てはいけません。彼は完全に正常な少年に育ってゆくでしょう。ただし、あなたが今、依存しないでひとりで行動することを彼に教えてあげればですが。あなたが二人のお姉さんたちにばかり好意を持っているのではないことと、ミルトンが役に立つ社会人になってほしいとあなたが思っていることと、このふたつのことがミルトンに伝わるようにしなければなりません。

母親：あの子は精神的に何か異常があるのではありませんか？

アドラー：彼の担当医が作ってくれたプロトコールを見るかぎりでは、ミルトンにはダウン症の気はまったくありません。彼は賢くて知的な子どもなのですが、ただ問題は、いつまでも赤ん坊でいたいと思っていることです。あなたは彼に、いつまでも赤ん坊でいることよりも大きくなることの方がすばらしいのだと教えてあげなければなりませんね。難しい点については、担当医が相談に乗ってくれるでしょう。彼の状態を良くしてみようとするのは、やってみる価値のある努力です。あなたが我々と協力してくだされば、彼はきっと急速に進歩するだろうと確信します。

では、お子さんに会わせてください。

(ミルトンが部屋に入ってくる。学生たちが同席していることに少なからず驚いた様子で、母親を見つけて、その後ろへ走って行く。ミルトンは母親から離れようとせず、アドラーに身体を診察させない。アドラーがひとこと質問すると、ミルトンは母親を見上げて、「お母さん、答えて」と言う。彼はアドラーの方を見ようとせず、母親のスカートの後に顔を隠している。どう説得してもアドラーと話をしそうにないので、母親と子どもとは退出を許された。)

アドラー：私は生徒たちにいつも、患者が語っていることばを聴くだけでなく、あたかもパントマイムを見る時るように、患者の行動を観察しなさい、と言っています。この子が「こんにちわ」とも「さようなら」とも言おうとしなかったのを見ましたか？ 彼は、私といかなる接触を持つことも拒否しました。どんなにやさしく語りかけてもだめでした。しかし、このことでがっかりすることはありません。2度目はもっと簡単でしょう。あきらかにこの子の担当医は、この子とどうすれば友だちになれるかを知っています、だって、この子からプロトコールに書かれているような沢山の反応を得ているのですから。この子は母親にひどく依存しているのだと私が解釈している時に、もし、あなたがたの誰かが、それが本当かどうかを疑ったとしても、実際にこの子の行動を見たときに、その疑いは晴れるだろうと思います。たとえば話ですが、もし母親を天井のシャンデリアからぶら下げたとしたら、あの子はきっと、何とか母親の側へ行く方法を見つけるだろうと思いますよ。母親は、あの子にとって、ただひとつ

の依り所なのです。母親の手助けなしで、ひとりで手を洗ったり着がえをしたりできないだけでなく、私の質問に答えることさえひとりではできないのです。

あの子のいわゆる喘息に関しては、呼吸器系のことばで表現された、母親への依存であると言えます。私はこれを器官言語と呼んでいます。個人がことばで自分を表現しない時に、器官なり器官系なりの機能異常でもって表現するのです^[4]。喘息の症状を治す薬は数多くあります。しかし、患者そのものを治す薬はありません。この子を治そうとするならば、彼の自己評価を向上させることしかありません。

ところで、よく質問を受けるのは、5歳くらいになると個人のライフスタイルは固定しているという私の意見についてです。この事例は、ライフスタイルは5歳でもうできあがっているということ、美事に見せてくれたでしょう^[5]。ミルトンは、自分が支配することができない者を、彼の私的社會から閉め出しています。彼が小学校に入学すると、はじめのうちはかわいがられるでしょうから、あるいは問題行動の徴候を見せないかもしれません。しかし、私はほとんど確信するのですが、社会的な、さらには性的な、他者との交流が要求されるようになると、彼は必ずや問題をおこすようになるであります。

学生：なぜあの子は、あなたが母親から引き離そうとした時に泣いたのですか？

アドラー：長い間垣根にへばりついて暮らした鳶が、その垣根から引き離されるのを怖れているようなものです。ミルトンが泣くのは、彼の力への意志のもうひとつのあらわれかたであるにすぎません。ミルトンが母親を本当の意味で愛しているとは思わないように。彼が母親に関心を持つのは、ちょうど寄生虫が宿主に関心を持つようなものです。もし宿主が寄生虫の気に入らないようであると、寄生虫は宿主を罰するのです。涙は弱さの印であると一般には信じられていますが、この事例では涙は確実に力の印なのです。ミルトンは母親以外の人とは一切、目を合わせも、話を聴きも、自分から話しもしません。この母親へのひどい依存が彼の神経症の起源です。彼の態度全体はこう言っています。「あなたがたはぼくには何も要求できないよ。だって、ぼく病氣なんだもの。」この子は将来、自殺したり犯罪に走ったりする危険性があります。もし彼が、いつまでも今のままで、人生に立ち向かう用意をしなかったとして、ある時独立で努力して解決する他はない人生の大問題に出くわしたとすると、あるいは自殺するかもしれません。またあるいは、母親以外の人々すべての無関心は、やがて社会への敵対心となって、結局犯罪を介してしか社会と接触を持てなくなるかもしれません。犯罪者たちが刑務所で書いた詩の中には、自分の犯悪や欠点を、母親や酒や麻薬、あるいは失恋などのせいにして責任のがれをしているものがよく見かけられます。彼ら自身に勇気が欠けているということは棚上げなのです。

学生：目を合わしそうともしないし話をしようとしもない子どもには、どう接近すればいいのですか？

アドラー：アドラー心理学の治療法のレパートリーの中にある、あらゆるちょっとした工夫をすべてお伝えすることは不可能です。まず、最初のうちは子どもと直接に話をしようとしません。子どもがオープンに協力してくれなくても、その子について充分にわかってきて、母親にどうすればよいかを指導すれば、子どもは変ります。もうひとつ、子どもに関心を向けないことによって、子どもの好奇心を刺激することもできます。子どもは舞台の真中に立って注目を集めたいものです。私がもし、大きな絵本とか機会じかけの玩具とかで夢中になって遊んでいて、その子の存在に気づきもしないとすると、きっとその子は好奇心に抵抗できなくなってしまうでしょう。

その後の経過

この面接の後も、事例提示者がこのケースの治療を続けました。母親にこの子の取り扱いかたを理解してもらうのは困難でしたが、最後には、母親はこの子をもっと自由に自立して行動させることに合意しました。

母親は、この子が呼吸困難に陥った時に客観的であることが全くできなかつたので、喘息発作がおこれば必ずその場を離れるように指示されました。〔母親がこの指示を実行した結果、〕喘息は二週間以内に完全に消失しました。

しかし、ミルトンは、周囲を支配しようという野望を断念したわけではありませんでした。〔喘息発作はなくなりましたが、かわりに〕彼は強迫的に持続的に咳をし続けるようになって、喘息に対する母親の無関心に復讐しはじめました。母親は彼のもくろみにまんまとひっかかってしまいました。子どもが一点かせぎました。なぜなら、以前の喘息発作は1日に5～6回あっただけですが、今度の咳は1日中ずっと続くのですから。

ミルトンは入院させられました。病院の看護婦たちは、彼の咳には絶対に注意を払わないように指示されていました。入院第1日目は、彼は朝の間中ずっと咳をしていました。しかし、この間に、スタッフは彼ととても良い関係を樹立しました。というのは、彼は聴診器を与えられて、それ程重症ではない他の子どもたちを『診察』してまわる役割りを与えられたからです。おそらくこの時、ミルトンは、生まれてはじめて、本当の意味での自尊心を体験したのではないのでしょうか。事例提供者は彼の廻診のお供をして、ある少年が回復すると思うかどうか、ミルトンに尋ねました。ミルトンは、ある病棟担当医のしかめ面のまねをしながら、この子は今は非常に悪い状態であるが、必ず良くなると思う、と答えました。ミルトンはこの時、医師というものは、自分が病気になる暇もない程、他の人々を治療するのに忙しいものなのだとすることに気づきました。

〔病院内ではミルトンの咳は完全に治っていたのですが、〕退院して帰宅すると、咳が再発しました。しかし、母親は病院でのミルトンの様子を見てすっかり勇気づけられていたので、彼の症状には全く注意を払いませんでした。そして、ミルトンは、見るまにこの呼吸器言語による特殊な意志表示法を断念しました。けれども今度は、全くちがう種類の症状を使いはじめました。退院の翌週から、たえ間のないしかめ面と顔面のチック症があらわれたのです。おもしろいことに、この症状は、〔母親につれられて〕人前に出た時にしかおこらないのです。こうしてミルトンは、母親を最大限に当惑させたのです。この症状も、数週間の治療で消失しました。

それからミルトンはあるサマーキャンプに送り出されました。キャンプの指導者にあてて紹介状がつけられました。キャンプでの最初の数日間、彼はすっかりふてくされてしまいました。食事を拒否し、さまざまのトラブルをひきおこしましたので、キャンプ生活には全く適応できないということで、とうとう自宅に送り返されてしまいました。自宅に帰ると、それまでのいつよりもひどい多動症状があらわれました。精神科医が彼と何回か面接した結果、彼は、自宅に居るよりはキャンプに行っていたほうがはるかに良いということを受容してくれました。彼はキャンプにもどり、夏の残りの期間をかなりうまくキャンプ生活に適応してすごしました。これは、いくつかの競技で優勝できて、運動能力がすぐれていることを認めてもらえたからだと思われます。

秋になって帰ってきた時には、この子はある程度の自尊心を身につけており、一日中学校に居れるようになりました。児童相談所と教師の援助の下で、ミルトンは今ではすっかり社会に適応をとげております。

訳注

- [1] アドラーは、すでにこの時点で、『相手役』の概念を使って、母親のライフスタイルを推量している。推量の美しい一例である。
- [2] アドラーの時代の内科学では、クル病はすべて副甲状腺機能の低下症であると信じられていたのであろう。現在では、クル病は、副甲状腺の異常である場合もないではないが、普通はビタミンDの不足であると考えられている。
- [3] ミルトンのライフスタイルを現代風にまとめておく。
自己概念：「私はひとりでは問題を解決できない。」
自己理想：「上長者の注目や援助を独占したい。」
世界像：「上長者は私が悪いことをしている時だけ注目してくれる。」
結論：「それゆえ、いつも問題児でいよう。」もし、ニックネームをつけるとすれば、ゲッターである。ちなみに、母親はコントローラーである。
余談であるが、この事例を読んでいると、現代の家庭内暴力児に余りにも似ているので驚く。本人のライフスタイルもであるが、母子関係もそっくりである。今の中学生、高校生の問題行動は、アドラーの時代には5歳児がやっていたことなのである。
- [4] 器官言語という考えかたは現代の心身医学につながっている。アドラーは心身医学的発想を持った最初の人である。
- [5] この時期（1929年ごろ）のアドラーは、ライフスタイルは5歳ごろには固定すると考えられていた。後に彼は、ライフスタイルが固定する年齢を少しずつ引き上げて行った。現代では、10歳にならないとライフスタイルは固定しないとされている。

更新履歴

2012年6月1日 アドレリアン掲載号より転載